

差異の構図——「女であること」の社会的効果

吉沢 夏子

「アグネス・チャン」は、「アグネスちゃん」に聴こえる。彼女の片言の日本語は、小鳥のような声で語られ、幼児の言葉に聴こえる。

彼女の童顔は、少女のように見える。

これは、「アグネス・チャン」という記号が、日本で背負っている「宿命」である。アグネス・チャン氏のせいではない。

「アグネス・チャン」は、十七歳の天使のように愛らしい少女である。

アグネス・チャン氏は、三十歳すぎの、一人の子どもをもつ働く主婦である。

どこを捜しても、アグネス・チャン氏は存在しない。

「アグネス・チャン」だけがいる。

林真理子氏は、どこにもいない、アグネス・チャン氏に語りかけた。

彼女は、アグネス・チャン氏に向かって、「アグネス・チ

ャン」について論じようとした。

I

一九八八年のマスコミを賑わせた、いわゆる「アグネス・チャン—林真理子・論争」とは、一般に「子連れ出勤・是非・論争」として理解されている。仕事場に子供を連れていき、「職場に託児所を」と訴えるアグネス・チャン氏の言動に対して、林真理子氏が「働く大人の女」の立場から異を唱えた、つまり、「子連れ出勤」を是としそれを実践するアグネス・チャン氏と、「子連れ出勤」を非としそれに批判的である林真理子氏の間での論争である、と。そして、この論争の発端となったのが、『文芸春秋』に掲載された林氏の論文「いい加減にしてよアグネス」⁽¹⁾であり、それ以後、特に上野千鶴子氏の新聞投稿「働く母が失ってきたもの」⁽²⁾をきっかけとして、「子連れ出勤・是非・論争」が展開

したのである、という経緯もいまや広く知られるところとなつてゐる。さらに、上野氏がアグネス・チャン氏を擁護して「代理戦争」を買つてでたことが論争の局面を変えた——つまり、それ以前は、単なる個人攻撃の低レベルの争いだったが、それ以後、働く母親たちの建設的な意見が続出し、論争が意義深いものになつた——という評価も定着しているようである。

しかし、このような理解は、はたして事柄の本質を正確に映しているといえるだろうか。まず、アグネス・チャン氏と林真理子氏の間の実質的に「論争」とよべるような事態は起きていない。(したがつてここでは、「アグネス・チャン—林真理子・論争」という記号をめぐつて展開された現象の総体を、「論争」現象、と呼ぶことにした)。また、後に詳しく述べるように、林氏の論文は「子連れ出勤」の是非を論じたものではないので、この論文をきっかけにして「論争」が始まつたという認識も正確ではない。むしろ林氏の論文を最後とする一連のアグネス・チャン批判の動き——もつと正確にいうなら、そうした批判を支えている「心性」のようなもの、あるいは社会に対するある種の「直感」ないし「洞察」のようなもの——に何か見るべきものがあつたのではないだろうか。それは、「好き嫌いのレベルで争われた低次元の「女の論争」とも思えないし、「個人攻撃」といったものでもないだろう。確かに、上野

氏の投稿をきっかけとして展開されたいわゆる「子連れ出勤・是非・論争」もそれ自体として、それなりに重要な論点を含んだ有意義なものだった、と評価できる側面をもっている。しかし、その展開は、あくまで林氏の論文のある種の矮小化のうえになされたものであり、林氏——および中野翠氏ら——が一連の執筆活動の中で提起した問題とはある意味でまったく関係がなかつた、という事実には留意しておく必要がある。その事実関係について、まずごく簡単に振り返っておきたい。

林氏の論文「いい加減にしてよアグネス」が、この「論争」現象の、誰もが知る「表のきっかけ」なら、その十ヶ月ほど前に書かれた、やはり林氏の手になるエッセイ「今夜も思い出し笑い——あー驚いた」⁽³⁾は、知られざる「裏のきっかけ」ということになる。すべてはここから始まつたともいえるだろう。では、まずこのエッセイの中で、林氏が誰に対して、何を問題にしているのか、を明らかにすることによつて、林氏の提起した問題は、「子連れ出勤・是非・論争」とはさしあつて関係がなかつたということを確認しておこう。

林氏が「あー驚いた」といっているのは、『週刊朝日』の最終ページに載つた「編集部発」という小さなコラムの内容⁽⁴⁾についてである。『週刊朝日』では、その一週間前のグラビアページで、⁽⁵⁾「講演料一七〇万円」アグネス先生キタル

で、学園緊張。響く「ひなげしの花」今日も総勢六人」と題して、アグネス・チャン氏の文化人としての活動を「皮肉」まじりにとりあげ、「揶揄」する文章を載せた。これに対して、アグネス・チャン氏は直接『週刊朝日』の編集部を訪れ、「総勢六人は、いつもは四人、講演料一七〇万は、いつもは一〇〇万」であるという抗議を行った。「編集部発」には、アグネス・チャン氏の突然の来訪を受けた記者たちが、ひたすら恐縮し、「サインください」とはしゃぐ様子を書かれている。林氏はこの記者たちの「豹変ぶり」に「驚いた」といつているのである。彼女は、この「文化人アグネス」を「揶揄」する記事は、ジャーナリストとしてのある見識にもとづいて書かれたものである、と評価していた。彼女自身、『週刊朝日』には、容姿についてあげつらったりからかったりするような悪意に満ちた記事を書かれたり、その他いろいろと辛辣な扱いを受けてきたが、我慢し許してきた。それは、そうした意地の悪い視線にもとづく、「揶揄」や「パロディ」、「シニカル」な態度などがジャーナリズムにとって不可欠な表現手段のひとつであると判断したからである。しかし、「可愛いタレント」がある日編集部にやって来て抗議をしただけで、手の平を返したように態度をかえてしまうということは、「ジャーナリズムというものの見識」にもとづくある「スタンス」がはなはだ恣意的であやふやなものだったということになる。文化人ア

グネス」を「揶揄」する記事を支えていた「ジャーナリズム」というものの見識」とはいったいどこにいったのか、これが、林氏の率直な感想である。林氏は最後に、「豹変」した記者に対して「何があなたを変えてしまったのでしょうか」と疑問をぶつけている。この「問い」の重要性については後にまた触れることになるが、ともかく、以上のことから明らかなように、林氏がここで狙上りにさせているのは「アグネス・チャン氏の言動に対するジャーナリズムの態度」であり、「子連れ出勤の是非」ではない。さらに、これより二ヵ月ほど前に中野翠氏が、やはり週刊誌の連載エッセイの中でいち早くアグネス・チャン氏の「子連れ出勤」を取り上げているが、ここでも、主題はあくまで、アグネス・チャン氏の言動を「何か進歩的な思想のように取り上げ」、「彼女を働く女のオピニオン・リーダーか何かのように美化し、祭り上げている」マスコミの態度に対する批判なのである。

このように、「論争」現象の発端となった林氏や中野氏の「批判」は、まずマスコミ、ジャーナリズムに対してなされた。林氏も中野氏も、この段階までは、アグネス・チャン氏の「子連れ出勤」が「大人のきびしさ」の中から生まれた思想・信条のレベルに達していないと考えており、それをあくまで「個人的言動」だとみなし、それに対しては個人的な「感想」として反対していたにすぎなかった。

その後、アグネス・チャン氏が国会（参議院）の「国民生活に関する調査会」に参考人として招かれ、育児については意見を述べるといふ事態にいたったとき、その「批判」は、マスコミのみならず、彼女の言動を「もてはやす」役所関係や大学関係、一部の文化人たちへと拡がっていった。そして、国会という公の場所に出かけて行って「意見」を述べるとなれば、それはもう立派な思想であり「公的」活動である、という判断から、両氏はアグネス・チャン氏の言動自体をも批判の対象とするようになっていった。しかし、それは二次的なことであり、両氏の批判の矛先は、あくまで、アグネス・チャン氏の言動をもてはやし美化し、「権威」づけようとするマスコミ、大学、役所、一部の文化人たちに向けられている。彼女たちの文章は「なぜアグネス・チャン氏はこのような言動をとりえたのか」という問題意識、すなわち「アグネス・チャン氏にこのような言動をとることを許した、現代日本の社会構造そのものに何か不思議なからくりがあるのではないか」という「直感」に支えられている。そしてこの「直感」にもとづいて、現代日本社会のある側面を主題化しようとしたのが、林氏の「いい加減にしてよアグネス」だったのである。

林氏は、論文の中で、自分をこの論文執筆に駆り立てていったこのような「直感」、あるいは「心性」といったようなもの——それは具体的には、アグネス・チャン氏の言動

に対するある種の異和感、イライラ、腹立たしさ、などに現れる——を十分に意識化し相対化することに成功しているとはいえない。だからこそさまざまな解釈を許すことにもなったといえる。しかし、この「論争」現象の中で、何か見るべきものがあるとすれば、それは、林氏や中野氏の一連の執筆活動を支えているこの「直感」であり、それに基づく現代社会への「洞察力」である、とはいえないだろう。確かに、「子連れ出勤・是非・論争」も、従来からあるフェミニズムの「古くて新しい問題」——すなわち子育てをめぐる性別役割分業の是非——が、現代という時代——共働き、核家族、ひとりっ子やふたりっ子、が当然とされる風潮の中で、若い世代がひとたび子供をもつと大変である——を反映して噴き出したものだともいえ、それなりに時代の要請に合致した有意義性を認めることができるのだ。

さて、以下、このような観点から、林氏の論文にある、未だ対象化されざる論点をすくいだし、それを矮小化するのではなく、いわば極大化する方向で読み込むという作業を試みたい。⁷⁾「林論文」は、その後さまざまに批判の嵐に見舞われましたが、一部の人々の間に「共感」をよんだことも事実である。それはなぜか、を考えてみることも、あながち無駄なことではないだろう。

II

林氏は論文の冒頭で、「アグネスのことはもういい。私が腹がたつのは、こういう人をもてはやすマスコミ、役所関係である」という中野氏の発言を引用し、「私はここで日本人、特にある種のインテリがどうして彼女にこれだけ弱いのか少々考えてみたいと思う。つきつめて彼女を論じていけば、現在の日本の姿が見えてくるはずだ」と、論文の意図を明確にしている。彼女の疑問は、なぜアグネス・チャン氏のことになると、参議院も大学もジャーナリズムも「信じられないほど軽薄に大甘になるのか」という点にある。このことをつきつめて考えていくことによって、現代の日本社会のある一側面が浮き彫りになる、と彼女は考えたのである。さて、このような意図をもって始められた論文が、なぜ、多くの人々によって「アグネス・チャン氏の子連れ出勤を非難する単なる個人攻撃」だとうけとられてしまったのだろうか。まず、この点から考察を開始しよう。

林氏は、「日本社会におけるアグネス・チャン氏」を観察してある種の苛立たしさを感じていたに違いない。その苛立たしさは、おそらく次のような考えに支えられていると思われる。「人間は誰しも、その「実力」に応じた「位置」を、その社会の中で得る。しかしこれはタテマエであ

り、実際はそうならない。「実力」プラス「何か」があって、はじめてある「位置」が決まるのである。さて、アグネス・チャン氏の場合、今彼女がこの日本社会で得ている「位置」は彼女の「実力」に相応しいものだと到底思えない。不当に優遇されているのではないか。あまりにも「実力」以上の「位置」が与えられているのではないか。これが、彼女の苛立たしさの第一の原因である。

「実力」と「位置」の乖離を生む「何か」とは、この場合、端的に「女であること」といってよいだろう。日本は——おそらく外国でも同じだろうが——「女であること」がさまざまな効果を生む、そういう「歪み」をもった社会である。林氏が、マスコミ、そして国会や一部の文化人を批判の対象としたのは、彼女が、この本質がこのような「男社会」の「歪み」にあることを「直感」していたからに他ならない。しかしこの「歪み」を構造の側から分析的にとりあげることがきわめて困難な作業であることも、彼女には「直感」的にわかっていたのではないかと思われる。したがってこの「歪み」の存在を説得的に呈示するためには、アグネス・チャン氏という一人の個人に照準し、その「実力」とその得ている「位置」の落差を、さまざまな事例によって傍証する以外に、とるべき方法がなかったのである。これももっとも安易な方法ではあったが、それだけにきわめてわかりやすい方法でもあった。しかし、林氏自

身も半ば認めているように、この方法では、どうしてもアグネス・チャン氏という一個人の「屬性」についてさまざまな角度から主題化せねばならず、このことが、「個人攻撃」という印象を生むことになってしまったのである。このように、「林論文」を支える「直感」とは、すなわち「女であること」がさまざまな効果をもつという社会の仕組みそのもの、もう少し普遍的なことばでいえば、「女であることが有徴となる」社会構造そのもの、に對する「異和感」、腹立たしき、にあった。女であれば、誰でもが、否応なくこうした「男社会」の「歪み」の中に組み込まれてしまうという「直感」である。林氏はこの「直感」に突き動かされて、誰しもが知ってはいるが、表立っては決して口にしようとはしない「事実」を指摘したのである。そして「林論文」は、こうした「直感」を共有する人々の間に共感をよんだのである。

しかし、「林論文」やこの「論争」現象を、以上のような観点から読もうとする試みはほとんどなされていない、といつてよい。⁽¹²⁾このような視点が、「論争」現象の経緯を通じてほとんど見られなかったということは、非常に興味深いことである。というのも、そのことは、この「事実」が、誰でもが「知って」はいるが、意識化し対象化しえないほど、自明なものになってしまっている、ということを端的に物語っているからである。そして、このような「自明

性」の深さが、林氏の苛立たしきの第二の要因となっているのである。以下この点について述べてみよう。

「林論文」は、現在の日本社会の「男社会」としての「歪み」を対象化する、という問題意識をその内に孕みながらも、結果として、アグネス・チャン氏という一人をめぐる議論へと収斂していった。それは、すでに述べたように、林氏が論文の中で、アグネス・チャン氏の「実力」(だと林氏が考えるもの)とアグネス・チャン氏の得ている「位置」(だと林氏が考えるもの)の乖離を示すという方法しかとりえなかったからである。信州大学での講義録の引用や、国会でのやりとりは、その事例としてとりあげられた。しかし、はっきりいっておかなければならないことは、アグネス・チャン氏がこの日本社会においてどのような評価されようと、どのような「位置」をもとて、そのこと自体は、さしあたってアグネス・チャン氏自身の間与するところではない、ということである。「不当に優遇されていること」に関して、彼女自身には何の責任もない。林氏もおそらくこのことには気づいていただろう。ではなぜ、林氏はアグネス・チャン氏の言動に苛立ちを覚え、このような論文を書くにいたったのか。それはおそらく、林氏には、こうした「男社会」の「歪み」にまったく気づかないで、無防備に振る舞う「女」の「鈍感さ」(あるいは、まったく気づかないふりをするという「ずうずうしさ」)が、ど

うにも我慢ならないものに映ったからであろう。アグネス・チャン氏は、自分の「位置」についてまったく内省していない（ように見える）。自分が否応なくこの「男社会の「歪み」に巻きこまれてしまっている、ということについて何の自覚もなければ反省もない（ように見える）。これこそ、林氏のイライラのもう一つの原因なのである。林氏が、「子連れ出勤」問題をとりあげたのは、実は、この「鈍感さ」を示すための事例としてであり、それ自体の「是非」を論じようとしたわけではない。「子育て」はあくまで個人的な問題であり、それぞれの個人がそれぞれの事情に応じた対応をすればよいという考え、また働く母親が十分に活躍できるような環境を整えるために、必要に応じて職場に託児所をつくったり、地域の保育所や英才児教育を充実させたりするべきだという意見に反対する人はいないだろう。そんなことは当然のことだからだ。林氏があたかもこうした考えや意見に反対しているかのように受け取った人々がずいぶんいるようだが、それは誤りである。林氏が問題にしたのは、「子連れ出勤」について、「まわりの人々がみんな、喜んで面倒をみてくれて、いつも楽しみにしてくれて、職場の雰囲気も和やかになった」といった感想をもつアグネス・チャン氏の「自己中心性」「無邪気さ」である。いわば「男社会」の中にどっぷりつかったまま、「女であること」を対象化する意識がみられない。そこにはフェミニ

ズムへと連なるような論点は何もないといつてよい。にもかかわらず、きわめて不思議なことに、アグネス・チャン氏の言動はあたかも「革新的」な思想・運動であるかのようになり、とりあげられたのである。「論争」現象の中で、「林論文」は「男社会」を肯定し、フェミニズムにとって抑圧的な働きをするものであり、アグネス・チャン氏の言動は「働く母親」の権利を要求し、フェミニズムを押し進めるものである、という図式ができあがっていった。この奇妙な「逆転」はいかにして生じたのか。以下、この点について、「論争」現象をこうした「逆転」へと決定的に方向づけた、上野氏の「アグネス擁護」を批判的に検討することによって、さらに議論を深めてみたい。

上野氏の「アグネス擁護」の論理は実に明快である。上野氏はまず「林論文」を、「職場で男たちと肩を並べてきた女の側の正論」として読んだ。——「プロの職業人として許されないこと」という意識は、「男社会」の価値観やルールの正当性を身につけることによって生じた。しかし「ルールを守れ、と叫ぶのは、ルールに従うことで利益を得る人たちである。女たちはルールを無視して横紙破りをやるほかに、自分の言い分を通すことができなかった。アグネス・チャン氏の言動は「非常識」で「甘ったれ」ているとみえるかもしれないが、そうした「横紙破り」こそフェミニズムを押し進めるものなのである。——こうした論

理それ自体にはまったく非の打ちどころがなく、異論をさしはさむ余地がない。まさしく「フェミニズムの側の正論」である。確かに、「林論文」は上野氏の指摘するような、「ルールに従うことで利益を得る人たち」の(すなわち「男社会」に通用している)価値観を無意識の内に踏まえているところがある。しかし、すでに述べたように、林氏が「働く大人の女」とか「プロの職業人」を強調したのは、「男社会」の価値観をことさらに支持した結果というよりはむしろ、「男社会」の「歪み」にあまりに無自覚で、あたかもそんなものなどないかのように振る舞う女の「無邪気さ」を際立たせるためだったといえる。「林論文」の中に、そうした抑圧的な働きをする論点がある、という指摘は的を射たものであり、当然あつてしかるべき批判である。しかしそれでも、「林論文」を「正論」としてのみ読むことは、「林論文」の中に本来含まれていた「問題意識」をまったく切り捨ててしまうことになり、やはり矮小化の誹りを免れないのではないだろうか。

さらに、アグネス・チャン氏の言動がはたして「横紙破り」であるのか、という点については大いに議論が分かれるところである。林氏(及び中野氏)は、最初からアグネス・チャン氏の言動が何かの思想・信条に基づくものである、とは思っていない。たとえば、「私のやっていることは、確かに非常識でルール違反であり、他人に迷惑をかけ

ることかもしれない。しかし、働く母親の権利を主張するために、あえて従来の価値観を覆すようなことをするのだ」という意識が、もしアグネス・チャン氏にあれば、林氏の批判はまた違ったものになっていただろう。上野氏の「アグネス擁護」の論理が精彩を放つのは、たとえばこんな場合ではないだろうか。ごく普通のOLが、以上のような意識に基づいて、普通の会社に子どもを連れていき仕事の合間におっぱいを与えたり、おむつを替えたりしながら自分の職務を懸命に果たしている、しかし、職場にはさまざまな軌轢がおき、意地悪をされたり、中傷や非難をうけたりして、辞めざるをえない状況に追い込まれている、しかし辞めれば親子して路頭に迷うことになる、——このような事件が社会問題となったとき、そのときこそ上野氏の論理で、私たちはこの女性を擁護すべきなのだ。アグネス・チャン氏の言動は「横紙破り」といったものではない。むしろ「男社会」の「歪み」にまるまる乗ったもの、それを強化こそすれ、けっして「問題化」することのない無害なものだった。若桑みどり氏は「アグネスが国会に呼ばれたのは、実はかの女のやりかたが、「かれら」にとつて無害・有益であるからだ」と述べている。日本社会は、まだ依然として、「女性の働く権利を根本的には認めまいとする支配者的思想」がその社会の隅々にまで行き渡り、実

にうまく機能している筋金入りの「男社会」なのである。もしアグネス・チャン氏の言動が、「男性中心の権力構造と企業利益優先の現在の体制」(≡「男社会」)を支える価値観を、根本的に批判するような危険なものであったなら、マスコミも国会も、彼女に対してこれほど好意的な態度を示すことはなく、無視するか、徹底的に叩いていたことだろう。そのようなときにはじめてアグネス・チャン氏の言動を「横紙破り」と評価することができないのではないだろうか。

上野氏の「アグネス擁護」はいかにも見当外れの感を免れない。それは、アグネス・チャン氏の言動が以上のような「男社会」の「歪み」を逆に強化することにもなりかねないものである、という可能性にまったく気づかず、彼女の言動を進歩的・革新的で、フェミニズムを推し進めるものである、と簡単に評価していることが、「あまりに楽観的」という印象を与えるからである。上野氏は、「資本制と家事労働」の中で、女が働くということが、家長長制(すなわち性別役割分業を基盤とする現代の社会体制)を揺るがすどころか、逆に強化しているということを、つまり、日本がいかに「働く女」を根本的に認めない社会であるかを、実に見事に論証している。そして先進諸国の女性たちが、しだいに子どもを産むという割のあわない仕事から「おりている」にもかかわらず日本女性だけが子どもを産

み続けているという事実を指摘し、「母性主義みたいなイデオロギー的な文化装置があって、母になることが女性の自己実現だとかいわれているものだから、ついつい母になっ

てしまったりするわけです。この国の文化装置もまだまだ

うまく機能しているな、女の人たちはうまく社会化されて

いるな、とほとほと感心してしまいます」と述べている。

日本は、結婚し妻となり出産して母となることが女の幸せである、という考え方が無条件で善とされる社会である。

社会は、女に子どもを産み続けさせることができなければ、存続しない。母性主義イデオロギーのようなものが必要と

されるのはそのためである。だとすれば、「子どもと母親の

幸せな図」を描き続けるアグネス・チャン氏母子の存在は、

それだけで「男社会」にとって利用可能なもの、有益なもの

ということになる。中野氏は、アグネス・チャン氏の

「子連れ出勤」とともに、女性芸能週刊誌の「マタニティ

・ブーム」をとりあげ、「子ども」は、今や聖域の中のイ

キモノなのだ。今や「子ども」は「平和」「健康」と並んで、

現代日本の三大神様——けっして相対化されることのない

絶対的正義になっていたのだ」と述べ、「子ども」をもつ母

親が、現代日本で揺るぎのない「位置」を占めていること

を指摘している。今「結婚して子どもを持つている女」は、

無条件に善の価値を付与される。それに対して、「独身で

子どものいない働く女」は、依然として周辺の「位置」

しか与えられない。「男社会」にあって、アグネス・チャン氏は、けつして「コワイ」存在ではない。アグネス・チャン氏の言動は、一見「横紙破り」に見える、しかし、彼女の存在は、けつしてそうではないからである。「林論文」はまさにその点を衝いたのである。

したがって、アグネス・チャン氏の言動がフェミニズムにとつて有益で、「林論文」はフェミニズムにとつて抑圧的である、という認識には、奇妙な「逆転」があるといわざるをえない。それはまた、現代日本がその根底においては、以上述べたように「男社会」の構造を維持・強化しようとする「力」に支えられながら、表面的には、「フェミニストたること」を装うべく仕向けられている、という事情に微妙に影響されている結果であるともいえる。現代日本では、どのような理由からであれフェミニズムの思想に反対することは端的に「悪」である。誰もが、フェミニストたらしめとし、またフェミニストであることを示そうとしている。「キャリア・ウーマン」、「女の時代」など口当りのいいことばが、いつもジャーナリズムを賑わしている。しかし、それはまだ実質のないスローガンにすぎない。このような状況のなかでは、アグネス・チャン氏の「子連れ出勤」はまさに恰好の「標的」となる。アグネス・チャン氏の言動に好意的な態度を示すだけでフェミニストの「装い」を保つことができ、同時に深層では「母性イデオロギー」の強

化を遂行することができるのである。「男社会」がこれを利用しないわけがない。上野氏は「女による女の「子連れ出勤」批判を、高みの見物して喜んでいるのはいいだけであらうか。この「代理戦争」の本当の相手は、もっと手ごわい敵かもしれないのである」と述べている。まさにその通りである。しかし、上野氏は、「林論文」を「子連れ出勤」批判として読み、「林論文」の中にある、「手ごわい敵」が必死で隠蔽しようとしている「男社会」の「歪み」を明るみに出すきっかけとなるかもしれない重要な論点を抹殺してしまった。そしてこのことが、結果として「手ごわい敵」に手をかすことにならない、という保証はどこにもないのである。

以上、「林論文」が社会に対するどのような「洞察」や「直感」に支えられているか、について検討した。すでに明らかのように、「林論文」は、「子連れ出勤」の是非について論じたものでもないし、アグネス・チャン氏に対する「個人攻撃」を意図したものでもない。この点をもう一度だけ、繰り返しておく。「女であること」が、この「男社会」でどのような効果をもちうるのか、その極端な「効果の事例」を、私たちはそこに、そして「論争」現象それ自体の中に読むことができるのである。

さて、私たちは、こうして「林論文」の中にフェミニズムにとつて重要だと思われる論点を採り当てた。では、次

にそれがいかなる意味で重要なのか、についてさらに考察を進めてみよう。

III

林氏が論文の中で指摘しようとした「事実」、すなわち「男社会」の「歪み」とはどのようなものであるか、を検討することから始めよう。「男社会」において、女は「差別されている」と感じる。女はその「実力」に応じた「位置」を社会から与えられていない、という「不平等感」をもつ。「人間は誰しもその「実力」に応じた「位置」を、その社会の中で得る」と書いたが、男と女では、そもそも出発点が違う。男には最初から何がしかのアドヴァンテージが与えられているが、女はゼロから始めなければならない、というようなものだ。男ならどんな人でも、その「実力」にはこの制度に規定された「アドヴァンテージ」が含まれている。だからたとえ同じ「実力」でも、男はこの「アドヴァンテージ」が加算された「実力」だと評価されるため、女より有利になる。それが「不平等感」につながるのである。「男であること」だけですべての男に等しく与えられるこの「アドヴァンテージ」の存在が、「男社会」の「歪み」の構造を基礎づけている。「平等論」志向するフェミニズムは、まず当然のことながらこの「アドヴァンテージ」の

解消をめざす。しかし「男社会」の「歪み」とは、この「アドヴァンテージ」の存在だけに起因するわけではない。「男社会」には、「男（だけ）が女を評価する権利をもち、女が男を評価することがけつしてない」という絶対的な非対称性が存在している。そしてこれが、「歪み」をより複雑にしていると考えられる。女はまず、制度に規定された男の「アドヴァンテージ」を、「不平等」だと感じる。そしてさらに、その「実力」に応じた「位置」を男の評価によってのみ一方的に与えられるという「事実」を、「不平等」だと感じる。以上は、「男社会」において、女が一般に感じる「不平等」である。

しかし、このような「男社会」のからくりには、女が特殊に感じる「不平等」（ないし、男が女に感じる「不平等」というものがあり、さらにことが複雑になっているのである。この「男社会」では、「女であること」がさまざまな効果を生む。男の「アドヴァンテージ」がどんな男にも等しく、すなわち構造的に与えられているかによってさまざまに對して、「女であること」の効果は、どんな女であるに異なる、という意味で「恣意的」なものである。ここで問題となるのは、この「何か」について評価をくだすのが、常に男であるという点である。男も、「実力」プラス「何か」で評価されるという点では女と変わらない。しかし、男の「何か」は男たちが相互に評価しあうものであり、し

たがってその評価基準も、男たちが相互に納得しあう妥当な線へと一応の収束をみているといえる。しかし、女の「何か」は、あくまで「男社会」における女に対する評価基準によって、つまり「男によって」決められるのである。女が常に「見られる」存在であり、「受動的」だといわれる所以である。だから、男の場合、「実力」に比べて「何か」の占める割合が、極端に高くなったりするということはおそらくあまりないに違いない。しかし、女の場合は、その女がどのような女であるか、またもつといえ、その女のまわりにどのような評価基準をもった男が配置されているか、によってその「何か」に対する評価はきわめて「恣意的」になり、「何か」の占める割合が、それに応じてさまざまな値をとりうることになる。⁽¹⁸⁾このように、「男社会」では、男に与えられる構造的「アドヴァンテージ」を基盤に、「女であること」のさまざまな効果が複雑に絡みあい、「差異の構図」を構成している。したがって、「男社会」は、女が男に、男が女に、男が男に、それぞれがそれぞれの立場で抱くさまざまな「不平等感」に覆われていることになる。

フェミニズムがまず志向するのは、すでに述べたように、男に与えられる構造的「アドヴァンテージ」の解消である。しかし、ここで微妙な問題が持ち上がる。男の「アドヴァンテージ」さえ解消されれば、すなわち男も女もゼロから

出発する社会が成立すれば、本来に男女平等の社会が成立したことになるのかどうか、という問題である。たとえ出発点が横一線になったとしても、「男(だけ)が女を一方的に評価する権利を持つ社会」であれば、それは依然として「男社会」であることになり、女の側の「不平等感」が解消されるかどうか、疑問なしとはいえないからである。私たちは、ここでさらに本質的な問題、いわば、平等とは何か、フェミニズムの志向する平等とは何か、何がどうなれば男と女が平等である社会だといえるのか、という問題に直面せざるをえない。論理的にいえば、女も男も相互に等しく評価する権利をもつようになったとき、はじめて男も女もゼロから出発する、といえるのかもしれない。なぜなら、男と女の間にある絶対的非対称性の解消とは、男(だけ)が女を一方的に評価する権利をもつ、という非対称性の解消に他ならないからである。しかし厳密にいえば、この非対称性は、男と女がまったく同一の評価基準を持つ、ということがない限り、解消されることはない。男も女も、全く同一の評価基準にもとづいて評価し評価されるような社会、そのような社会が「平等」な社会だということになる。しかし、そのような社会とはいったい具体的にどのような社会なのだろうか。もしかしたら、そのような社会は、おそらくそもそも「男であること」や「女であること」がほとんど意味をもちえない社会、男と女がいるとい

うこと、性が二つあること、がまったく意味をなさないような社会、つまり男と女の差異そのものが解消された社会であるかもしれない。あるいは、もしかしたら、そのような社会は、男の構造的「アドヴァンテージ」が解消され、男と女が同一の評価基準に基づいて相互に評価する権利をもち、なおかつ、「女であること」「男であること」が、相互に十分意味をもちうる社会、すなわち、「女であること」の効果、「男であること」の効果が「不平等感」を生むことのない社会であるかもしれない。いずれにせよ、フェミニズムにとって、「平等」とは何か、を繰り返し問い続けることは不可欠な作業であるように思われる。そして、以上のような「思考実験」へと我々を導くきっかけを与えてくれた、という点だけでも、「林論文」を評価することができるのである。

さて、ここで、誤解のないようにしておくかなければならないことがある。それは、「林論文」は、確かに「男社会」の「歪み」に対する鋭い「直感」に支えられてはいるが、「男社会」の「歪み」を根本的になくすべきだ、という主張を行っているわけではない、ということである。林氏はこの「男社会」の中で普通に育った普通の女性であるという点で、きわめて「健全な精神」の持主である。ただただいての男や女がこの「男社会」の「歪み」をあまりにも自明なこととして受け入れているのに対して、林氏はそれ

に非常に敏感で、自分がそこに巻き込まれているという事態について十分に自覚的・反省的である、という点が決定的に異なる¹⁹⁾。そのような林氏にとっては、こうした事態そのもの、に全く気づかない人々の「鈍感さ」、気づいていないかのように振る舞う人々の「ずうずうしさ」、あるいはそれをけっして相対化することのできない人々の「無邪気さ」が、まさに「揶揄」や「皮肉」の対象となるのである。林氏は、『週刊朝日』の記者の「豹変ぶり」を祖上へのせ、「何があなたを変えてしまったのでしょうか」と問いかけた。「何が」変えたかははじめから明らかである²⁰⁾。この問いは、「男社会」の「歪み」を相対化する視点をまったくもたず、ジャーナリズムの世界で「男の権力」をふるう「無邪気」な記者に対する、痛烈な「皮肉」なのである。

さらにいえば、「論争」現象自体が、当然のことではあるが、「差異の構図」の強力な磁場の内にあった、ということが出来る。山崎氏も指摘しているように、それが、林氏に不利に働いたことは否定できない。「コワイ女がカワイイ女をいびる」という図式²¹⁾が、いとも簡単に社会に受容され流布されることへの抵抗感のなさ、また林氏のかなり抑制のきいた淡々とした語り口の論文が、ヒステリックな「個人攻撃」だと解釈されてしまうという不思議、「論争」現象の中で「男社会」の「歪み」の構造が、ついに主題化されることになかったということ、これらのことはこの「差異の構

図」の強力な磁場の存在を抜きに説明することはできない。私たちは、男も女も、この「差異の構図」そのものを生き返らしてしまっていて、けっしてその外部にでることはできない。そして、実はそのために、「男社会」に「歪み」の構造が存在するといふ「事実」は誰にとっても（しかし、やはり女にとつてはなおさら）口にするのが困難なのである。なぜなら、まず第一に、この「歪み」の存在を論証することはきわめて困難であるからだ。「実力」と「何か」を厳密に分けることは非常にむづかしい。したがって、あくまで「男社会」では、「実力」と「何か」とを含めてすべて「実力」である、と考える「タテマエ」に強く固執せざるをえないのであり、こうした「タテマエ」に異論をさしはさむ側はたちまち現に今その社会で通用している価値観や評価基準によつて断罪されてしまうのである。⁽²³⁾第二に、「男社会」においては、「女であること」の効果が、どんな女でもけっしてゼロであることはない。ほんの僅かであれ、「女であること」の効果が、どんな女にも厳然と存在してしまうが、この「男社会」に「歪み」の構造が存在するという「事実」を口にした途端、それは言った人に直接跳ね返り、その人を傷つけづにはおかないのである。

フェミニズムは、常に、男に構造的に与えられる「アドヴァンテージ」の存在を告発し、問題にしてきた。しかし、それは、「差異の構図」の一つの側面ではない。もちろん

それが、まずさしあたつて解消されねばならない「差別」であることは、ほぼ間違いないだろう。しかし、フェミニズムは、この「差異の構図」のもう一つの側面、すなわち「女であること」のさまざまな効果についても、けっして「鈍感」であつてはならない。なぜなら、フェミニズムがもし、現在の社会に存在する「差別」の構造を告発するなら、「差別」のない社会とはどのようなものであるか、その未来の社会のあるべき姿について、鮮烈な「ヴィジョン」を構想している必要がある、そうした構想力は、まず現在の社会に対する必要があり、そうした構想力は、まず現在の社会に對する繊細な感受性がなければ、けっして養うことができないからである。「差異の構図」のもう一つの側面を感知する豊かな「デリカシー」、それを意識化し対象化する冷めた視線、それがあつてはじめて「社会」に對する洞察がはじまる、そして、「社会」に對する洞察があつてはじめて「理論」の構成が可能になる、とはいえないだろうか。

アグネス・チャン氏は、「アグネス・チャン」について何も知らない。

林真理子氏は、「林真理子」についてよく知っている。⁽²⁴⁾

注

(1) 林真理子「いい加減にしてアグネス」『文芸春秋』五月号 一九八八年三六四—三七四頁

(2) 上野千鶴子「働く母の失つてきたもの」「子連れ出勤」のフ

グネスを擁護」「論壇」一九八八年五月十六日『朝日新聞』

(3) 林真理子「今夜も思い出し笑い、あー驚いた」『週刊文春』

一九八七年七月十六日号

(4) 『週刊朝日』一九八七年七月三日号

(5) 『週刊朝日』一九八七年六月二十六日号

(6) 中野翠「電気じかけのペーパームーン」『サンデー毎日』

一九八七年六月十日・十七日号

(7) したがって、以下展開される論はすべてこの「読み込み」

の作業の結果であり、その内容についての責任はすべて吉沢にあることを予め断っておく。

(8) この場合、「実力」とはどういうものか、「実力」と「何か」

とはどう異なるのか、あるいは「不当」とはどういうことか、が実は大問題となる。後に、「実力」と「何か」を、究極的に分かつ基準を設定するむずかしさについて触れることになる。

(9) もう一つ重要なものとして、「外国人であること」が挙げられる。「林論文」では、むしろ「国際人アグネス」に照準がかわされ、「外国人であること」が日本社会でどのような効果をもつか、という論点が前面に出ているとも読める。しかし本稿では、林氏の一連の作品の背後にある一貫した「心性」をも考慮に入れ、「女であること」が生む効果という論点に絞ることにする。日本社会では、「女であること」と「外国人であること」が、けっして同じではないが、似たような「位置値」をもつともいえる。アグネス・チャン氏は、たまたまこの二つの要件をみたしていたために、「林論文」では、本来独立に論ずるべきこの二つの論点が融合してしまつたと

考えられる。また、さらに言えば、日本には「女子ども」というカテゴリーがある。林氏は、「女子どもの正論」には誰も反論できない、と述べている。「愛」や「平和」や「正義」がもし「女子ども」の口から語られたなら、それは無条件に立派だと評価される。それを本気になって批判する「大人」は、「大人げない」と失笑をかうだけである。日本社会では、アグネス・チャン氏はあくまで「アグネス・チャン」であり、「女子ども」のカテゴリーに入れられているのである。林氏はアグネス・チャン氏を「アグネス・チャン」としてではなく、「大人の女」として「平等」に扱おうとしたただけだ、ということもできる。

(10) 有徴とは、元来言語学・記号学で用いられることばである。たとえば、*human* (人間) は特別に区別を付されていない一般の範疇を表すが、*woman* (女) はこの一般的範疇からある部分を際立たせて排除する働きをする。その結果、*man* は *woman* と対立関係を形成し、男を意味することになる。ボーヴォワールの次のことばは、「女であることが有徴となる」社会構造における「女の状況」をよく示している。「男であれば、人類の中で男性がしめている特異の状況について本を書くといったことをゆめにも考えまいと思う。わたしが自分というものをはっきり定義したいと思うと、まずつぎのように宣言しなければならぬ、*わたしは女である*。何を主張するにせよ、その根底にこの真実がなければならぬ。男ならば、自分を考えるのにもまずある性に属する個人というふうに入り出したりはしない。彼が男であることは文句のない、自明の

ことである。」(ボーヴォワール『第二の性』生島遼一訳 人文書院 一九六六年 一三五頁)。

(11) なぜ、この「事実」を、表立って口にするのが困難になつてしまふのか、については後に述べる。

(12) わずかに、山崎浩一氏と栗本慎一郎氏の論評にこのような「読み」の姿勢をみいだすことができる。山崎氏は、林氏とアグネス・チャン氏の役割(ベビーフェイスとヒール)がはじめから決められていたこと、いやもつといえどもそもそ同じリングに上がることすら認められていなかったこと、が「不思議というしかない」と「現在の日本の姿」のある側面を問題にしている。そして「林論文」は、「論理も明晰だし、どう読んでも「個人攻撃」に終始した文章ではない。「つきつめて彼女を論じていけば、現在の日本の姿が見えてくるはずだ」というだけの内容はもった文章だと思ふ」と述べている(『朝日ジャーナル』一九八八年五月二十七日号のコラム「BATTLE」)。栗本氏は、「林真理子が提起したのは子育て論争ではないはず。男社会の中で女の自立は、どれだけ男に女を売らずに出来るかどうかという事柄は、(中略)自分の勝手の気分だけでお粗末な文化論を語ることが許されるのは、タレント、色っぽさのまだ残る「女」(つまりまだ売り物)という要素をもつ者以外に有り得るのかというあたりが、子連れ問題以上に大事なはず。(中略)男なら、一言「バカ」と言われるものを女だから、「まあいいよ、いいよ」と言ってもらつて、君たちは解放されるのか、女たちよ」と、きわめて単刀直入に、問題の所在を明らかにしている(『ア・マ』論

争」を採点する——総合不可)、『アグネス論争』を讀む』アグネス論争」を愉しむ会編一九八八年八月五四頁)。

(13) 若桑みどり「追記……『朝日』がつけたタイトルに抗議する」、『アグネス論争』を讀む』、『アグネス論争』を愉しむ会編一九八八年八月三三七頁

(14) 上野千鶴子『資本制と家事労働』海鳴社一九八五年五四頁

(15) 中野翠、前掲エッセイ

(16) 上野千鶴子、前掲『朝日新聞』「論壇」

(17) あまりにわかりやすい比喩で気がひけるが、たとえていうなら、男には最初から二〇ポイントのアドヴァンテージが与えられているが、女は〇ポイントから始めなければならぬ、ということである。だから同じ三〇ポイントの「実力」が、男は五〇ポイントで女はそのまま三〇ポイントだとカウントされることになる。素朴な「男尊女卑」の信奉者は、男も女も、実はこの制度による「アドヴァンテージ」の差異を男女間の絶対的な差異だと思ひこんでいることが多い。

(18) たとえば、「実力」が五〇ポイントの男の場合、「アドヴァンテージ」の二〇ポイントに「何か」が一〇ポイントで八〇ポイントになる男もいれば、「何か」が八ポイントで七八ポイントになる男もいる。しかし、「何か」が五〇ポイントで一〇ポイント稼ぐ男はそうはいない。しかし、このようなことが女の場合はいくらでも起こるのである。「実力」が同じ五〇ポイントでも、「何か」が七〇ポイントで一〇ポイントの「位置」を得る女もいれば、「何か」が五ポイントで五五ポイントの「位置」を得る女もいる。後者の女が、そし

て全般に普通の男たちが、前者の女に「不平等感」を抱いたとしても不思議ではない。

(19) 林氏において、それが誰よりも十分になされているというつもりはない。林氏自身が、「女であること」の効果を、この社会で享受していることは疑いがない。しかし、そうした事態を、少なくともアグネス・チャン氏よりは十分に相対化する視点もっている、ということだけは確かである。

(20) 端的にいえば、「アグネスの女にやられたのでしょう」ということである。しかし、林氏は「女にやられる」ことそれ自体を非難しているわけではない。それは男としては当然のことだ、という認識が林氏にはある。その意味で、林氏は、「男社会」の「歪み」を常にあっさり肯定する。彼女は、フェミニズムの理論家でもないし実践家でもないで、「男社会」の「歪み」を告発する、などという「大袈裟」なことでは考えていないだろう。ただ、こうした「歪み」の存在にあまりに「鈍感」な人々には、ちょっと皮肉の一つもいつてみたくなるということである。

(21) 『朝日ジャーナル』六月二十四日号（一九八八年）の三十頁には、子どもを腕に抱き「職場に乳児室を！」と訴えるカワイイ「天使」（頭の上に輪っかをかけている）と、どぎつち化粧をしすぎまじい形相で「大人の世界に子供をもちこむな！」と叫ぶ「鬼」（額から二本角が生えている）の漫画が描かれている。こうした漫画を「臆面もなく」載せるマスコミとそれをまったく当然のこととして受容する人々、彼らが「差異の構図」の強力な磁場のうちに埋没していることは疑

いがない。林氏はそうした記者の「臆面のなき」、ジャーナリストとしての見識を、「揶揄」の対象としたのである。

(22) だから、何が「実力」で何が「何か」であるか、はそれを判断する人の「恣意」に任される。すべてが「見解の相違」ということになってしまっているのである。「論争」現象においても、アグネス・チャン氏の信州大学での講義内容をめぐって「見解の相違」がみられた。

(23) 審判のいるゲームのルールを例にとるとわかりやすい。審判の判定が、明らかに間違っていたとしても、それに執拗に抗議したり、ぐずぐずと不服を言いつのったりする競技者は、観客の目にはとても見苦しく映る。そうした行為は端的に「潔くない」のであり、ゲームに参加している以上、そのルールに従うのは当然だとみなされ、非難される。文句ひとついわず、黙々と、誰にも有無を言わせないほどの「実力」をつけようとする、そういう態度が倫理的だと評価されるのである。

(24) スピノザは次のようなことを言っているようだ。人間は誰も感情から自由になることはできない。感情が感じがらめに捕えられている。しかし、人間は感情は何か、今自分を感んじがらめにしてこの感情の原因は何か、それを探究することはできる。原因がわかったところで、その感情から自由になれるわけではない。しかし、それを知ろうとする営み、それを探究している間は、少なくとも、人間は自分を捕えているその感情から自由になることができる。知ろうとする営み、それ自体において、はじめて人間は自由であることが

